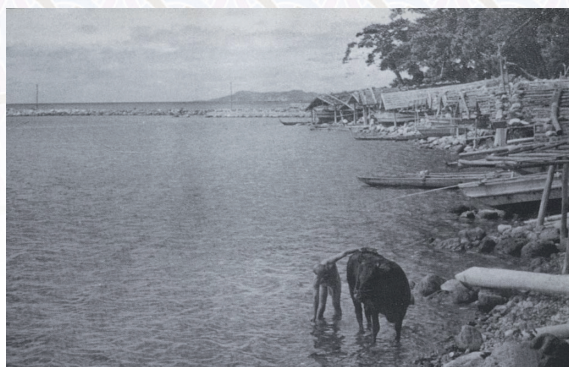


「都万漁港船小屋」

島根県隠岐の島町

船小屋は、建築材に自然木を使った平屋建てで、1棟は門口5 m、奥行き8 m、高さは3 mである。屋根は切り妻形の杉皮葺きで、割り竹で杉皮を押さえて玉石を乗せ、スロープは昔ながらに自然の浜石をそのまま使っている。約20棟の船小屋が海岸線に一直線に並び、都万のシンボルである高田山を背景に、漁村ならではの風景が撮影できるポイントでもある。

かつての船小屋は、昭和の初期に建てられ、その後何度か手直しされたために形にばらつきがあったが、それがかえって独特の風情を感じさせていた。現在の船小屋は、昭和62年に当初の船小屋が農道建設のために立ち退かざるをえなくなった時に、民俗資料的価値の高いものを後世に残そうと沖合へ約5 mずらして再現されたものである。再現費用は、県からの立ち退きの補償金と船小屋の所有者全員、旧都万村によってまかなわれた。船小屋は現在でも利用されており、採貝・採藻に使われる小型船が舳を揃えて収納されている。



昭和初期の船小屋



昭和後期の船小屋

また、船小屋に隣接している屋那の松原は、樹齢およそ300年の200本の黒松が長さ400 m、幅40 mにわたって続く松林である。これは、八百歳まで生きた八百比丘尼が若狭の国(福井県)から隠岐を訪れ、屋那に立ち寄り一晩で植えたものといわれているが、実際は、享保年間のころ、淡水と海水がまじった屋那の海を新田開発するために堤防を造り、そこへ黒松を植えさせたものだという。

みどころ



- 屋那の松原：船小屋のそばには、長さ400 m、幅40 mにわたって、200本余りの老松が枝を交えた美しい松原がある。日本白砂青松百選に選ばれている。